



千一夜物語 I

佐藤正彰 訳

世界古典文学全集

31

筑摩書房

千一夜物語 I

世界古典文学全集 第31卷

昭和39年6月25日第1刷発行

昭和58年9月20日第4刷発行

訳者 佐藤正彰

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8
郵便番号101-91 振替東京6-4123
電話 東京 291-7651 (営業)
294-6711 (編集)

0397-20331-4604

三晃印刷/矢島製本

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

千一夜物語

(第一夜から第百五十一夜まで)

佐藤正彰訳

5

あとがき

546

千
一
夜
物
語
I

アツラーの望みたもうところ也

果てしなく慈悲ふかく

慈悲ふかき

アツラーの御名において

宇宙の主、アツラーに讃えあれ。しかして、使徒らの王、われらの君主にして宗主ムハ
ンマドの上に、祈りと平安あれ。しかして、その御一統皆様方の上に、報酬の日に至るま
で永久に絶対不離の祈りと平安あれ。

次。願わくは、古人の伝説の、今人への教訓となつて、人はここにわが身ならぬよそび
とらに起こりし出来事を見んことを。しかるとき、人は過ぎし国民の言葉と彼らに至りし
ところとを敬いて、とくと思い見、もつてみずから身を戒むるべし。

されば、先の世の物語をば伝えて、後の世のために教訓となせし者に光栄あれ。

さて、かかる教訓のうちよりこそ、『千一夜』と名づけられし物語、ならびに、そこに
含まるるあらゆる不思議なることどもと箴言とは、選び出されたるもの也。

千一夜物語

語り伝えられるところでは——さあれアッラーはさらに多くを知りたい、さらに賢く、さらに力強く、さらに恵みふかくなります——その昔——時のいにしえと時代時世の過ぎし世のうちに、消え去り現われ出したことどものなかに——インドとシナの島々に、サーサーンの諸王のうち一人の王がいた。その王は多くの軍隊と、左右の臣と、家来と、おびたしい供まわりの主であった。そして二人の子供があり、その一人は大男で、末子は小男であった。二人とも雄々しい騎士であったが、大きいほうは小さいほうにまさる騎士であった。この大きいほうが父王の国々に君臨し、人々のあいだで正しく治めたから、領地王国の住民たちは、彼を慕った。その名をシャハリヤール王シャハリヤールと叫ぶ。小さい弟のほうは、その名をシャハザマン王シャハザマンといい、サマルカンド・アル・アジャムの王となっていた。

こういう事態がずっとつづいて、兄弟はそれぞれの国に住んでいた。そしてめいめい自分の王国で、二十年のあいだ、信徒の民草の正しい統治者であった。かくて兩人とも朗らかと晴れやかな極みにあった。

こうしてなおもつづいていったが、そのうちとうとう、大きいほうの王は小さいほうの弟にぜひとも会いたいと思うようになった。そこで自分の大臣に、出発して弟をつれて来るように命じた。大臣は答えた、「お言葉承わり、仰せに従います。」

大臣は出発して、アッラーのお恵みにより、つつがなく安着した。さつそく王弟のところへ参上して、平安を言上した。それから、シャハリヤール王がしきりに会いたがっておられる、今度の旅の目的も、兄上を

お訪ねくださるようお招きにまいったしだい、と申しあげた。シャハザマン王はこれに答えた、「お言葉承わり、仰せに従う。」そして王は出発の準備をさせ、天幕や、らくだや、牡らばや、家来や、左右の臣に、勢ぞろいをさせた。それから自分の大臣を国の司に任じて、兄王の地を求めて出かけた。

ところが、夜中ごろになると、王は宮殿に忘れものをしたことを思い出した。それはあたかも兄王に贈ろうと思っていた、みやげの品だったので、そのまま立ち帰って、宮殿にはいった。すると、そこでは王妃が寢床に横たわって、奴隷のうちの一人の黒人奴隷に抱かれているのであった。これを見ると、王の面上に世界は暗くなった。そして王は心中で言った、「おれがわが都を出たか出ないかというのに、はやこのような出来事が出来たとあらば、兄上のもとでしばらく不在にしていたならば、この自堕落女の身持は、はたしてどんなことになるであろうか。」そこで、王は剣を抜いて、寢床の敷き物の上の兩人を斬り、殺した。それから即時即刻引き返し、野營の出発を命じた。そして兄の都に着くまで、夜の旅をつづけた。

兄は弟の到着を悦んで、みずから出迎えにゆき、弟を迎えて、これに平安を祈った。悦びの限りに悦んで、弟のため都を飾り立て、あふれる真情をこめて話しはじめた。しかしシャハザマン王は、王妃の事件を忘れかねて、悲しみの雲が顔を蔽っていた。その顔色は黄色くなり、そのからだは弱った。それゆえ、シャハリヤール王は弟のこのありさまをみたとき、これはシャハザマン王が自分の故国と王国を出て、遠く離れているせいと心中で考え、これについてはもう何もたずねず、弟をば彼の道に残しておいた。けれども日々のうちのある日、弟に言った、「おお弟よ、どういうわけか知らぬが、とにかく見受けるところ、おまえのからだはやせ、顔色は黄色くなつてゆくな。」弟は答えた、「おお兄上、私はわが身の奥深くに、生傷を受けております。」けれども、自分の妃が何をしているのを見てきたかは、打ち明けなかった。シャハリヤール王は言った、「私といっしょにぜひ、徒歩と騎馬の狩りに出かけ

てもらいたい。おそらくそうすれば、おまえの胸も晴れるであらうからな。」だがシャハザマーン王は承諾しようと思ぬので、兄はひとり狩りに出かけたのであった。

さてこの王の宮殿には、庭を見晴らす窓がいくつもあった。シャハザマーン王が、そういう窓のひとつに肘をついて外を眺めていると、そのとき宮殿の戸が開いて、そこから二十人の女奴隷と、二十人の男奴隷が出てきた。そして兄王の王妃は、一同の中央にいて、輝くばかりの美しさを見せて、身を揺すって歩いている。泉水のほとりにつくと、一同はいっせいに着物を脱いで、互いに入り乱れた。と、突然、王の妃は叫んだ、「おおマサウドよ、やあマサウドよ。」するとすぐに一人の頑丈な黒人が駆け寄って、后を抱きしめた。后もまた彼を抱きしめた。それから黒人は后をおおむけに倒して、上に乗った。これを合図に、ほかの男奴隷全部が、女奴隷を相手に、同じようにした。そして一同長いあいだこうしたことをつづけ、明けがた近くなるまで、彼らの接吻、襲撃、交合、その他これに類したことをやめなかった。

これを見ると、王弟は心の中で言った、「アッラーにかけて、おれの災いも、この災いにくらべればずっと軽いわい。」そしてすぐに、自分の悩みと悲しみが消え失せるのを覚えて、ひとり言を言った、「まったく、これはわが身に起こったすべてよりもはなはだしい。」そしてこのときから、ふたたび飲み食いをはじめ、これをやめることはなくなった。

こうしているうちに、兄王は旅からもどってきて、兩人互いに平安を祈り合った。それから、シャハリヤール王は弟シャハザマーン王の様子を見はじめたが、弟の血色と顔色がもとに復し、顔も元氣を取りもどしたのを見た。そのうえ、あんなに長い間、わずかし食物をとらなかつたのが、魂をうちこんで、食べるようになっていたのを見た。兄王はそれをいぶかって言った、「おお弟よ、先だってまでおまえは顔色も黄色かったが、今では血色ももとに復しておる。事の次第を話して聞かせてくれ。」弟王は答えた、「私の最初色蒼ざめていた原因は、申し上げましょう。しかしなぜ血色がもとに復したかお話し申すことは、ご容赦

ください。」王は言った、「ではまず、おまえの顔色の変ったことと衰弱した原因を、聞かせてもらおう。」弟は答えた、「おお兄上、実は、兄上が大臣を私のほうにお遣わしになって、御手のあいだに私のまかり出ることをお求めなすったとき、私は出発の準備をして、わが町を出ました。ところがやがて私は、兄上にお贈りしようと思っていた宝石、過日御殿でさしあげたあの宝石を、思い出しました。そこで引き返してみると、私の妃は一人の黒人といっしょに寝ているのです。しかも兩人は、私の寝台の敷き物の上に眠っていました。私は兩人を殺して、兄上のごころにまいりました。だが、この事件を思い出しては、たいそう悩んでおりました。これが私の最初の色蒼ざめ、やせ衰えていたいわれです。だが私の顔色の回復については、その原因を申し上げることは、ご容赦ください。」

兄はこの言葉を聞くと、弟に言った、「アッラーにかけて、ぜひとも、おまえの顔色の回復の原因を話してくれるよう頼む。」そこでシャハザマーン王は、自分の見たことすべてを、一部始終、放埒な王妃と泉水の黒人どもの出来事を、細どもらさず語り聞かせた。しかしそれをくり返しても詮ない。次に弟は言い添えた、「そして兄上の災いは、私の災いよりもいっそう災い多いように思えました。これは私に反省をしい、そして私の顔色と血色の回復の原因となり、また私の魂が食物にもどつた

(1) 「千一夜物語」中の固有名詞と地理の漢としてゐることは、感嘆すべき事柄である。したがって穿鑿は無用だ(マルドリユス)。

(2) *Shahrīar*. 「町の主」の意。ペルシア語(マルドリユス)。他に *Shahrī-yār*, *Chahriar*, *Chahriar* 等の表記も見られるが、アラビア語のローマ字表記はすべてマルドリユスのまゝに従う。

(3) *Schahzaman*. 「世紀または当代(随一)の主」の意。ペルシア語(マルドリユス)。ガランは *Schahzenan* と書く。これらはペルシア伝説に出てくる名であるという。

(4) 「平安(または救い) 汝と共にあれ」というのは、回教徒間に用いられる挨拶である(マルドリユス)。

原因ともなつたのです。しかしアッラーはさらに多くを知りたいまゝする。」

こうした次第である。シャハリヤール王は、この弟の話の聞くと、今度は自分が、顔色がすっかり変わり、顔がひきつり、分別が減つてしまつた。そしてひと時のあいだ、そういう状態であつた。そのあとで、王はシャハザマーン王のほうを向いて、言つた、「何よりもまず、おれはそれをわれとわが目で見とどけなければならぬ。」弟は言つた、「では、徒歩と騎馬の狩りに出かけるふりをなさるのです。しかし遠くに行くかわり、私の部屋に隠れておいでになるがよい。さすれば兄上はその場のありさまを目のご覧になり、實際に見てお確かめなされましよう。」

即刻、王は触れ役人に出発を布告させ、兵士たちは天幕を携へて、都の外に出た。王もいっしょに出て、天幕の下に落ち着くと、若い奴隷たちに言いつけた、「何人も余のところに立ち入らせぬように。」それから王は変装して、ひそかに立ちいで、宮殿の、弟のいるところへとおもむいた。着くと、庭を見晴らす窓辺に坐つた。

さて、ひとときとたたないうちに、白人の女奴隷たちが、女主人を取り囲んで、黒人たちと共に現われてきた。そして一同は、襲撃、接吻、交合、その他これに類したことどもに関し、シャハザマーンの言つたとおりのことをすべてした。一同は日傾時まで、こうした楽しみのおうちに時をすごした。

シャハリヤール王はこうした事態を見たとき、正気は頭から飛び去つた。そして弟シャハザマーンに言つた、「いっしょにここを立ちのびて、アッラーの道の上に、われらの運命のありさまを見に出発いたさう。なんとなれば、われわれはもはや、王位とはなんらかかわりあつてはならぬ、だれかわれわれの事件と同様の事件を経験した者を見いだせるまでは。さもなくば、まさしく、われわれの死のほうを、生よりも好ましいものとならう。」これに対して、弟もしかるべく答へた。それから、二人はそろう宮殿の秘密の門から逃がれ出た。そして日夜旅をつづけて、ついに塩からい海のほとりの、淋しい草原のまん中にそびえる、一

本の木のところに着いた。この草原には、淡水の目があつた。兩人はこの目で水を飲み、腰をおろして休息した。

日中のひとときもまたたぬうちに、海がにわか荒れはじめ、そして突如、海から黒煙の柱が出てきて、空に立ちのぼり、この草原のほうに進んできた。これを見ると、兩人ひどく恐れて、その高い木の天辺のぼり、いつたい何事かと眺めはじめた。ところが、たちまちその柱は、一人の魔神と変じた。丈高く、たくましい恰幅と厚い胸、そして頭上に一つの櫃をのせていた。魔神は陸に上がり、兩人ののぼっている木のほうにやつてきて、その下に止まつた。それから櫃のふたをとつて、中から水晶の大箱をとり出し、そのふたをあげた。するとただちに、水晶からほとばしり出て、ひとりの好ましい、美しさに照り渡り、ほほえむときの太陽と等しく、光り輝く若い娘が現われ出た。詩人が次のごとく言つたのは、まさしくこの娘のことにちがいない。

闇の中の炬火、その乙女現われるれば、夜は明るく。乙女現われて、その光もて、曙は明らか。

太陽はこの乙女の光明もて、月はその眼の微笑もて、光を放つ。その神秘の面衣破るるや、ただちに生きとし生ける者は、恍惚としてその足下にひれ伏す。

しかししてその眼差しのやさしきひらめきの前に、熱情の涙の潤いは、あらゆる眼瞼の端をぬらすなり。

魔神はこの美しい乙女をつくづく眺めたりえて、これに言つた、「おお絹物の女王よ、おまえの婚礼の当日、おれにさらわれたおまえよ、おれはこの淋しい場所、ちよつとひと眠りしたい。ここならば、アーダムの息子の目が、おまえを見ることはできないからな。そうやつて海と陸の旅の疲れをいやしたうえて、そのときおれは、おまえといつても、そのことをするとしよう。」乙女はこれに小鳥の歌の聲で言つた、「おやすみなさい、おお魔神たちの父、彼らの冠よ。どうかそれがあなたを力づ

け、あなたに快いものでありますように。」そして魔神は乙女の膝に頭をのせて、そのまま眠ってしまった。魔神のほうは以上のようなのである。すると乙女は、そのとき木のてっぺんのほうに顔をあげ、木のなかに隠れていた二人の王を見つけた。すぐに、彼女は膝の上から魔神の頭を持ち上げて、それを地面におろし、木の下に立って、合図で二人の王に言った、「降りていらっしやい、この鬼神などこわがることはありません。」二人は合図で答えた、「おお、おんみの上なるアッラーにかけて、そんなあぶないまねはご容赦ください。」彼女は言う、「お二人の上なるアッラーにかけて、すぐさま降りていらっしやい。さもないと鬼神に言いつけます。そうすれば、あなたがたはこのうえなく悪い殺され方で殺されるでしょう。」すると二人はこわくなって、彼女のそばに降りた。女は立ち上がって二人を迎え、すぐに二人に言った、「さあ、槍をふるって、激しくきついひと刺して、わたくしを突き刺さない。さもないと、鬼神に知らせます。」おそろしさに、ジャハリヤールはジャハザマーンに言った、「おお弟よ、まずおまえからさきに、この女の命ずることをしてやらない。」弟は答えた、「いや、兄上が手本を示してください。それなら私は、私は何もいたしません、あなたは年上なのでから。」そして二人は、互いに目で交合の合図をしなが、乙女について譲りあいをしはじめた。すると女は二人に言った、「なぜそんなふうにお二人で目くせをしているのですか。もしすぐさまお二人が進み出て、きつく、激しく、長いあいだ、してくださらないなら、今すぐ鬼神に言いつけます。」すると、魔神がこわいたために、二人とも命じられたとおりのことを、女にした。

二人が言うなりになって、所要の条件で事を果たすと、乙女は二人に言った、「お二人ともまったくおじょうずです。」次に乙女は衣囊から小さな袋をとり出し、中から五百七十個の印形をつらねた首輪を出して、二人に言った、「これは何かおわかりになりますか。」二人は言った、「わかりません。」すると乙女は言った、「これらの印形の持ち主はみな、この鬼神の何も気づかぬ角の上に、ひそかに私と交わったのでございませ。それゆえ、あなたがた二人のご兄弟も、それぞれご印形をくださいませ。」そこで二人はそれぞれ手からはずして、印形を二つ与えた。すると、彼女は二人に言った、「実はこの鬼神はわたくしを、婚礼の夜にさらって、この水晶の箱の中に入れ、その箱をさらに櫃におさめ、櫃には七つの錠をかけ、そのうえで、波浪と打ちあいぶつかりあり、とどろく海の底ふかく、沈めたのでした。けれどもこの鬼神は、およそわたくしたちのうちの一の人の女が、何かを望むときには、もうどんなものもこれに打ち勝つことはできないということを、知らなかつたのです。それに詩人も言っております。

友よ、女どもを信することなく、その約束には微笑せよ。なんと
なれば、女どもの機嫌不機嫌は、その女陰の気まぐれしだいなれば。
女どもは偽りの愛をばらまくも、不実はその心を満たし、その衣
服の芯を成す。

うやうやしくユースフの『言葉』を想起せよ。魔王は『女』ゆえ
に、アーダムを追放せしめしを忘るるなかれ。

また汝の非難をやめよ、友よ。無用のことなり。明日ともなれば、
汝の難ずる男の心中に、かりそめの恋情につづいて、狂おしき情熱

(1) Ahi: 太陽が傾きはじめるころの時刻(マルドリュス)。正午から日没まで
の時刻。

(2) すなわち、泉のこと(マルドリュス)。

(3) Ganni: 『精霊』を意味する(マルドリュス)。回教徒の信する妖霊で、後
出のようにいろいろの種類がある。複数形は gann (Jinn)。

(4) アダムの子孫、人間のこと。

(5) Erit (Irid): 『狡猾なる者』。Ganni と同義語(マルドリュス)。のちに
『ジン』と同じになったが、それらの中で特に悪魔的で邪悪な妖霊を言うよし。

(6) Yussouf: ヨセフのこと。有名な『創世記』中の『エジプトのヨセフ』
の話。「ヘーラン」第十二章。

(7) Eblis (Iblis): 妖霊一族の中で、特に悪質な一党の首領。

生すべければ。

しかして言うなかれ、『われもし恋するとも、世の恋する男らの狂気ざたには陥るまじ』と。言うなかれ。まことに、男にして女らの誘惑より、つつがなくなるのを見るは、世にまたとなき奇蹟たらむ。」

この言葉に、二人の兄弟は驚嘆の限りに驚嘆して、互いに言いあつたのであつた、「もしあれが確かに鬼神であつて、しかもその威力をもつてしても、その身に、われわれよりもさらに災い多いことどもが起つたことあらば、これぞ、われわれの心を慰さむるに足る出来事ではある。」そこで二人は、平安と言葉を交わして後、即刻その乙女と別れ、心慰められ、啓発せられ、決意をつけられて、それぞれのが都へと戻つた。シャハリヤール王は自分の宮殿にはいると、妃の首をはねさせ、女奴隷たちと男奴隷たちの首も、同様にさせた。次に大臣に命じて、毎夜処女の若い娘を一人連れてこさせた。そして毎夜、こうして処女の娘と寝ては、その処女を奪つた。そして一夜明けると、これを殺した。王は三年の長きにわたつて、このような所業をやめなかつた。されば人々は、苦痛の叫びと恐怖の動搖に陥り、なお残る娘たちをつれて、逃げ去つた。かくて都には、この乗り手の襲撃の相手をつとめることのできる娘は、ひとりもいなくなつてしまつた。

こうしてゐるうちにも、王はいつものように、新しい若い娘を連れてくるよう、大臣に命じた。大臣は外に出てさがしてみたが、娘は見あたらない。魂は王ゆえに怖れに満ち、大臣はすっかり悲しみ、悩んで、おのが住居にもどつた。

ところが、この大臣自身に二人の娘があつた。どちらも美しさと魅力と光輝と完全に満ち、滋味あふるる娘であつた。上の娘の名はシャハラザードといひ、下の娘の名はドニアザードといつた。姉のシャハラザードは、多くの書物、年代記、いにしへの諸王の伝説、過去の民族の歴史などを読んでいた。また、過ぎし時代の諸民族と古代の諸王と詩人たち

に關する史書千卷を、所蔵するともいわれてゐた。非常に弁舌さわやかで、話を聞くのはまことに心地がよかつた。

父の姿を見ると、彼女が言つた、「なぜそのように、打つて変わったご様子でいらつしやるのですか、悲しみと憂への重荷を負つて。それと申しますのは、お父上さま、詩人も言うではございませんか、『おお女、悲しむ者は、氣をおとすなかれ。何事も長くはつづくまじ。喜びもなべて消え失せ、悲しみもなべて忘れ去らるるなり』と。」

大臣はこの言葉を聞くと、王に關して起つた委細を、始めから終りまで、娘に語り聞かせた。するとシャハラザードは言つた、「アツラーにかけて、お父上さま、どうかわたくしをその王さまと結婚させてくださいませ。あるいは生きながらえるかもしれませんし、あるいは回教徒の娘たちのための身代りとなり、王さまのお手から一同を救い出すすがとなるかもしれませぬから。」すると大臣は言つた、「おまえの上なるアツラーにかけて、けつしてそのように危険に身をさらすものではない。」娘は言つた、「どうあろうともぜひそうしなければなりません。」そこで大臣は言つた、「ろばと牛と、地主との間に起つたことが、おまえの身に起こらないように、用心するがよい。」娘はたずねた、「ろばと牛と、地主との間に、いったいどんなことが起つたのでございませぬか。」そこで大臣は娘のシャハラザードに、次のように語つた。

こういう話じゃ、おお娘よ、むかし一人の商人がいて、莫大な富と家畜を持ち、妻があり、子供たちの父であつた。至高のアツラーは、彼に鳥獸の言葉の知識をも、授けたもうた。ところで、この商人の住む地は、大河のほとりの肥沃な地方であつた。またこの商人の住居には、一頭のろばと牛がいた。

ある日のこと、牛はろばのいる場所にやつて来たが、見るとその場所は、きれいに掃かれ、水がまいてある。飼槽へは、よくふるいにかけて大麦と、よくふるいにかけて藁があり、ろばは寝そべつてのびのびと休んでゐる。それに、主人がろばに乗るときも、たまたま急を要する場

合、ちよつとひと走りするだけで、ろばはすぐにもどつて休めるということも見きわめた。ところで、その日、商人は牛がろばにこう言っているのを聞いた。「せいぜいおいしく食べなさいよ。それがきみにとつてからだによく、じょうぶになり、よく消化するように。おれのほうはくたびれているのに、きみは元氣だ。きみはよくふるにかけた大妻を食ひ、かしくかれています。そして、おりのりの間ときたま、主人が乗るにしても、すぐに帰してもらえるのだ。ところが、ちとらとときは、畑を耕すのと水車場の仕事にこき使われるばかりさ。」すると、ろばは牛に言った、「おお、頑健と忍耐の父よ、まあ嗅かわり、おれの言うようにする。おれは友情からして、まったくアツラーのお顔のため以外に他意なく、言うのだからね。きみが畑に出されて、首に軛をつけられたら、地面に転んで、もう起きないのだよ、たとえぶたれてもね。そして起きあがっても、またすぐに寝ころがるのだ。そこで牛小屋にもどされて、そら豆を出されても、少しも食べないのだ、まるで病氣みたいなふりに。こうして、がまんして、一日でも、二日でも、三日でも、飲まず食わずでいなさい。そういうようにすれば、きみは疲れと骨折れから休めるだろうよ。」

ところが、そこに商人がいて、隠れて、彼らの話を聞いていたのだ。家畜係の男が牛のそばに来て、秣をやつてみると、牛はほんの少ししか食わないのであつた。翌朝、仕事に引き出すと、牛は病氣になつていた。すると商人は家畜係の男に言いつけた、「ろばを引き出して、一日じゅう、牛のかわりに働かせなさい。」男はもどつて、牛のかわりにろばを引き出し、一日じゅう働かせた。

日暮れにろばが小屋にもどると、牛はその好意を謝し、その日一日疲れを休めさせてもらったことを謝した。だが、ろばはこれにひと言も答えず、このうえなく強い後悔を悔いた。

翌日は、種時き男がやつてきて、ろばを引き出し、日暮れまで働かせた。ろばはもう首の皮がすりむけ、疲れてへとへとになつて、やつともどつてきた。牛はこのさまを見ると、ろばにまごころこめて感謝し、言

葉をつくしてはめたたえはじめた。すると、ろばは牛に言った、「以前、おれは実に安らかだつたが、思えば、恩ほど仇になつたものはない。」次に付け加えて言った、「それでもなお、いいかね、おれはきみにもう一度いい忠告をしてあげるもの、知りたまえ。うちの主人がこう言っているのを聞いたよ、『もし牛が自分の場所から起きあがらないようだったら、おれを牛殺しのところにやつて、屠ってもらい、その皮で食卓用の皮を作ってもらわなければならぬな』とね。おれはきみの身が心配でならない。なんとか助かる道を考えたまえ。」

牛はろばの言葉を聞くと、お礼をのべてから言った、「あしたは自分から進んで、男たちといっしょに、おれの仕事をしに行くとしよう。」そこで牛はさっそく食いはじめ、秣を全部平らげ、そのうえ舌で槽まできれいになめた。

こうしただいであつたが、彼らの主人は、隠れてこの話を聞いていたのだ。

夜があけると、商人は妻といっしょに、牝牛の牛舎のほうに出かけ、二人で腰をおろした。すると牛曳き男がやつてきて、その牛を引き出して、外に出た。ところが、牛は主人の姿を見ると、しっぽをふつたり、音高くおならをしたり、右往左往、やたらと駆けまわつたりはじめた。商人はおかしくなつて、ひっくりかえつて尻もちをつくほど笑いこけた。すると妻が聞いた、「何がそんなにおかしいのですか。」夫は言った、「私が見もし、聞きもしたあることなのだが、それを口外すれば、私は死ななくてはならぬのだ。」妻は言った、「どうあつても、それを聞かせてください、おかしいわけを言つてください、たといそのためあなたが死ななければならぬとあつても。」夫は言った、「私は死ぬのがこわい

(1) Schahrazade 「都市の娘」の意(ペルドラキス)。ガランは Scheherazade (月の娘)。他に Shehrezād, Schahrazād, Shehrazade, Chahrazad 等いろいろの表記がある。

(2) Dinazade 「世界の娘」の意(ペルドラキス)。ガランは Dinarzade (黄金のごとく貴き女)とする。イスラム辞典は Dinazād.

ら、それをおまえにもらすわけにはゆかぬのだ。」妻は言った、「それでは、この私のことがおかしいのですね。」それから、夫と喧嘩をはじめ、しつこくからむことをやめず、あまりのことに、ついには夫はすっかり困ってしまった。そして子供たちをその場に呼びよせ、法官と証人たちを呼びにやった。そして、妻に秘密を打ち明けて死ぬ前に、遺言をしようと思った。なにせ、妻は父方の叔父の娘でもあり、子供たちの親でもあり、これまで自分の年齢の多年にわたって、連れ添ってきたのであってみれば、ひとかたならぬ愛情で、妻を愛していたのだからな。そのうえ、彼は妻の親戚全部と界限の人たちを呼んでこさせ、一同に事の次第を話し、自分が秘密を言え、とたんに死ぬのだということ語った。

するとそこにいる人たちはみな、妻に言った、「あなたの上なるアツラーにかけて、この件はもう問わぬことにしなさい。あなたのご主人、あなたの子供たちの父親が、死んでしまつてはいけないから。」けれども妻は言うのだ、「このひとが私に秘密を明かしてくれないことには、そのままにはおけません、たといそのためこのひとが死ぬことになろうとも。」そこでみなも黙つてしまつた。商人は一同のもとから立ちあがって、庭のなかの家畜小屋のほうに出かけた。まず洗淨をし、それから、もどつて秘密を明かして死のうと覚悟したのだ。

ところで、この商人は、五十羽の牝鶏を満足させることのできるほど、元気のいい雄鶏を持つていた。また一匹の犬も持つていた。その犬が雄鶏を呼んで、ののしり、こう言っているのが、商人の耳にはいつた、「家のご主人が今にも死のうというのに、そんなにうきうきして、恥ずかしくないのか。」すると雄鶏は犬に言った、「それはまたどうしたのだね。」すると犬は事の次第をくり返すと、雄鶏は言った、「アツラーにかけて、家のご主人も知恵がないな。おれなんぞは、五十羽の女房を持ちながら、一人を喜ばせ一人を叱りつけながら、ちゃんとなんとかやっていけるぞ。ご主人とては、たった一人の奥さんきりないくせに、それを御する手だてもやり方も、ご存じないとは。なに造作ないことさ。ご主人は奥さんのために、手ごろな桑の枝を二、三本切つて、いきなり

奥さんの私室にとびこんでからに、奥さんが死んでしまふか、前非を悔いるかするまで、ぶちのめしてやりさえすればいいのさ。そうすれば、もうどんなことについても、うるさく問いただしたりするなんてことは二度とはしないよ。」こう言つたのだ。商人は犬としゃべっている雄鶏のこの言葉を聞くと、光明がその分別にもどつて、そして妻をなぐつてやろうと決心したのだ。

ここで、大臣は話をやめて、娘のシャハラザードに言った、「ちよろどこの商人がその妻にしたように、王さまはおまえになさるかねない。」娘は言った、「で、どんなことを商人はしたのでございますか。」大臣はつづけた。

商人は妻のために桑の枝を切り、それを隠し持つて、妻の私室へはいり、妻を呼んで言った、「おまえの部屋に來なさい。秘密を話してあげろが、だれにも見られたくないから。そのうえで私は死ぬことにする。」そこで妻はいっしょにはいつたので、夫ははいつてとたんに私室の戸をしめきり、そこで妻に飛びかかつて、氣を失うばかり、打つて打つて打ちのめした。すると妻は言った、「悪うございました、悪うございました。」それから夫の両手両足に接吻しはじめ、本心から前非を悔いたものだ。その後で、妻は夫と一いっしょに外へ出た。それで並みいる人々は大いに悦び、親戚一同も大いに悦んだ。こうして皆の者は、死ぬまでこのうえなく仕合せな、このうえなく多幸なうちに、すごしたのであつた。

彼はこう言つた。大臣の娘シャハラザードは、父のこの話を聞くと、言つた、「おお父上さま、それでもやはり、わたくしは、お願いしましたとおりにしていただきます。」すると大臣は、それ以上たつてとめず、娘シャハラザードの嫁入り衣裳を用意させておいて、シャハリヤール王に知らせに参内した。

そのあいだに、シャハラザードは自分の年下の妹に、よくよく言い含めて、こう言った、「わたくしが王さまのおそばへあがつたら、あなたを迎えによこします。あなたが来て、王さまがわたくしとの御用をおすませになったのを見たら、こうおっしゃい、『おお、お姉さま、どうぞ何かふしぎなお話をして、わたくしたちに夜を過ごさせてくださいませ』と。するとわたくしはいろいろなお話をいたしましょう。それは、もしアツラーのおぼしめしあらば、回教徒の娘たちの救いの原因となることでしょう。」

そのあとで、父の大臣は娘を連れにきて、いっしょに王のところに参加した。王は大いに悦んで、大臣に言った、「用意は万端ととのっているか。」大臣はうやうやしく言った、「はい。」

王がその若い娘をわがものにしようとすると、娘は泣きだしたので、王はこれに言った、「どうしたのか。」娘は言った、「おお王さま、わたくしにはひとりの妹がございまして、それに別れを告げたいのでございませぬ。そこで王はその妹を迎えにやると、妹は来て、シャハラザードの首に抱きつき、とうとう臥床ふしどのそばにうずくまってしまった。しかし王は立ちあがった。そしてそのまま、処女シャハラザードを捉えて、その処女を奪った。

それからみなで雑談をはじめた。

するとドニアザードはシャハラザードに言った、「あなたの上なるアツラーにかけて、おお、お姉さま、何かわたくしたちにお話をして、今夜をすごさせてくださいませ。」シャハラザードはこれに答えた、「心から悦んで、当然の敬意のお務めをいたしました。けれども、このお育ちよろしく、生れながら挙措みやびの王さまの、お許しがあればのことでございます。」王はこの言葉を聞く、また一方では不眠に悩んでいたおれから、シャハラザードの話を聞くのをきらわなかった。

そしてシャハラザードは、この第一夜に、次の話をはじめた。

第一夜

商人と魔神との物語

シャハラザードは言った。

おお幸多き王さま、わたくしの聞き及びましたところでは、むかし、商人のなかのひとりの商人がおりまして、数々の富を持ち、あらゆる国にわたって手びろく商売をいたしておりました。

日々のうちのある日、その商人は馬に乗って、商用のため二、三の地方に向けて、出発いたしました。ところが暑さがあまりひどくなつたので、彼は一本の木の下に腰をおろし、そして食料袋を開いて、食物とそれからなつめやしの実をいくつか取り出しました。なつめやしを食べおえると、その核かたを手のなかに拾い集めて、それを勢いよく遠くに投げ棄てました。すると突然、その男の前に、丈たけの高い一人の鬼神おにが現われ、剣を振りかざしながら、商人に近づいてきて、叫びました。「さあ立て。きさまがおれの子供を殺したように、おれもきさまを殺してやるから。」商人は当惑と恐怖の極に達して、これに申しました、「いったいどうして、私があなたのお子さまを殺したというのですか。」鬼神は言いました、「きさまはなつめやしを食ってから、核かたを投げたろう。その核が飛んできて、おれの息子の胸に当たったのだ。というのには、おれと息子は、ちようどそこの空を通っていたのだ、おれは息子を運び、息子はおれに運ばれて。そこでそれが最後となつて、子供はそれなり、即座に死んで

(一) Kadi: 裁判官(ケルドリネス)。民事、司法、宗教に関する裁判官。公証人の役もつとめる。

しまったわい。」商人は、もう自分には頼りも救いもないことがわかりまして、鬼神イハクのほうに両の手のひらをさし出しながら、言いました、「おお大鬼神さま、私は信者でございまして、あなたに嘘などつくことはできません。ところで、私にはたくさんの富があり、また子供たちも妻もある身です。それに、家には人さまから頼まれて、あずかっておいである品々がございます。ですから、どうか私をいったん自宅にやってしかるべき人にしかるべきものを返させてください。それがすんだら、私はあなただどころにもどって来ます。そのあとでかならず、あなたのそばにもどって来るという、約束と誓いを立てます。そのうえで私を好きなようにしてください。アッラーが私の言葉の保証人でございます。」すると鬼神は信用して、商人を出発させました。

そこで商人は自分の国に帰って、あらゆる絆を絶ち、しかるべき者にしかるべき責務を果たしました。次に妻や子供に、自分の身に起こったことを打ち明けました。すると皆、泣き始めました、親戚も女たちも子供たちも。それから商人は遺言をして、その年の終りまで、家族といっしょに暮らしました。こうしたあとで、いよいよ出発の決心をし、経帷きょうい子を小脇にかかえて、近親や近所の人々と親戚たちにいとまごいをし、そして鼻にかかわらず出かけました。皆は彼の身の上を嘆いて、愁傷の叫びをあげはじめました。

さて商人のほうは、友人親戚をそのままに残して、旅をつづけました。そして鬼神の手に身を渡さなければならぬ、くだんの場所に着きました。その日はちょうど、正月元旦でした。ところで商人が腰をおろして、わが身にふりかかったことについて泣いていますと、そこに一人の年とつた老人が、鎖でつないだ一頭のかもしかをひいて、商人のほうにやってまいりました。老人は商人に挨拶して、その繁栄を祈ってから申しました、「鬼神イハクともの出没するこんな場所に、どうしてたった一人でとどまっていなさるのか。」そこで商人は、鬼神とのあいだに起こったこと、この場所に来ているわけを、話して聞かせました。すると、かもしかの主人のその老人は、非常に驚いて言いました、「アッラーにかけて、お

お兄弟よ、あなたの信義はまことに見上げた信義じゃ。またあなたの話には実に不思議な話で、もしこれを針をもって目の内側の片すみに書いておいたならば、うやうやしきのものを考える人の反省の種ともなるものであろう。」それから、商人のかたわらに坐って申しました、「アッラーにかけて、おお兄弟よ、わしはあなたと鬼神とのあいだにどんなことが起こるかを見ぬうちは、あなたのおそばを離れずまい。」そして言葉どおり、老人は居残って、商人と話を始めたのでしたが、見れば、商人は深い悲しみと不安な想いに促われて、こわさとも恐ろしさに、気も失いかねないありませんでした。こうして、このかもしかの主人がそこにずっといっしょにおりまして、そこに突然、もう一人の老人が、黒犬の種類イハクの兎狛犬を二頭連れて、二人のほうに向かつて進んでまいりました。近づいて来ると、二人に平安を祈り、鬼神ともの出没するこんな場所に、二人がとどまっているわけを尋ねました。そこで二人は一部始終を語りました。ところが、その老人が坐ったと思うまもなく、第三の老人が、一頭の椋鳥色の牝らばを連れて、彼らのほうにやって来ました。その老人は一同に平安を祈り、彼らがこんな場所にとどまっているわけを尋ねました。そこで彼らは一部始終を話しました。しかし、その話をくり返しても、何の益もございません。

こうしているうちに、一陣の砂ほこりの旋風うずかぜが立ち上り、大風が激しく吹きつけながら、この草原の中ほどに近づいて来ました。次に砂煙が消えて、例の鬼神が、鋭く研ぎ澄ました剣を手に持って、現われ出しました。双の眼臉からは、火花がほとばしり出ていました。鬼神は彼らのところに来て、まん中にいる商人を引つ捉えて、これに言いました、「さあ来い、きさまがおれの子供を、おれの生命のいぶきを、おれの心の焰を殺したように、おれもきさまを殺してやるから。」すると商人は涙を流して、嘆きはじめました。そして三人の老人もまた激しく泣き、呻き、涙にむせびはじめました。

しかし第一の老人、かもしかの主人はどうとう思い切つて、鬼神の手に接吻しながら、言いました。「おお鬼神さま、おお鬼神たちの王さま